

先月、坂井先生の大学、香川大学にお邪魔してきました！！いやぁ～・・・あそこから色々な発想が生まれてるんですね。
その時にサンフェイスのホームページの先生のコラムを利用させていただいてる、岐阜県の親の会の方々が居られるらしいです！たくさんの方々にご利用いただいているようで、ほんとに嬉しい限りです！ありがたやぁ～・・・岐阜の皆さん見えますかぁ～(^-^)/
サンフェイスホームページを活用していただき、ありがとうございます！今後も坂井節をどんどん広げて言ってくださいね！！
さて、今回も始まるんですが、先生張り切りすぎて、入りきりません(^-;)なので、何回かに分けてお届けいたしますっ！！ 久田

第13回『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

コミュニケーションの自己点検

1. 子どもとのやりとりを考えるときに

VOCA を活用したコミュニケーションの方法を提案したのだが、VOCA があればそれでよいかというとそのようなことはありません。コミュニケーションが成立するためには、手段があればそれでよいかというとそうではなく、コミュニケーションが成立するような環境を作っていかなければならないということなのです。VOCA を導入していても、やりとりがうまくいかない経験をする人は多いはずですが、やりとりにはなっていない、何となく通じていないということを感じたり、やりとりにならず一方的であったり、相手から反応が返って来なかったりすることを経験するからです。

このようなとき、コミュニケーションしやすい環境が整えられているかどうかについて、やりとりを振り返ることが効果的な場合があります。コミュニケーションを苦手としている人たちとコミュニケーションしようとしているのである。支援する側が関わり方を考えることで、やりとりが少しでもスムーズにできるようになるかもしれないからです。

そこで、ここでは、やりとりを振り返るために、コミュニケーションの自己点検を提案し、障がいのある人とのコミュニケーションについて考えてみたいと思います。

2. コミュニケーションの自己点検

(ア) チェック1 その人に合わせる努力をしたか

私たちは、いろいろな場面で人とコミュニケーションをしています。このコミュニケーションは、キャッチボールと例えられることが多いと思います。それは、音声を紹介した意図のやりとりが、ボールのやりとりと同じように考えられるからです。

ボールを紹介したキャッチボールの場合、それが下手な人と上手い人がするときには、上手い人が相手の能力に合わせて、キャッチできるようなボールを投げなければなりません。そうしないと、キャッチボールにはならないからです。

コミュニケーションを考える場合も同様です。コミュニケーション能力の高い人の方が、相手に合せるようにしないとイケないということなのです。

ここで、努力というのは、私の場合はなかなか自然にできないからです。ついつい自分が楽な方向にと流れてしまうので、このような表現になっているということをご理解ください。

(イ) チェック2 音声以外のコミュニケーションについても考えてみたか

私たちは、最も便利な伝達手段である音声に頼ってコミュニケーションしているために、音声でのコミュニケーションを要求することが多いと思います。しかし、障がいのある人のなかには、音声ではうまくコミュニケーションをとることができない人たちがいます。そのような場合、音声だけにこだわってコミュニケーションしようとしてもうまくいきません。なぜならば、何か言われていることには気がついていても、何を伝えられているのかわからないからです。

このような場合には、音声以外のコミュニケーション手段で、お互いが理解することができる共通のモードは何かを考えることが大切だということなのです。

(ウ) 以降は次回に続きます・・・

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞(著書)

暮らしの中のコミュニケーション(やまびこの里) クラスルームコミュニケーション(こころリース出版会)
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア(エンパワメント研究所)など